

保育者による「気になる子ども」の評価

— 「気になる子ども」と発達障害との関連性 —

藤井 千愛¹⁾・小林 真

Assesment for Young Children with Needs for Special Care by Nursery School/
Kindergarten Teachers : Relation between Children with Needs for Special Care and
Develpmental Disorders.

Chiaki FUJII & Makoto KOBAYASHI

本研究では、保育者(保育士/幼稚園教諭)による「気になる子ども」についての調査を行った。「気になる」理由の自由記述をカテゴリー分類し、クラスター分析によって「気になる子ども」を7つのタイプに分類した。自由記述の内容からみた7つのクラスターの内訳は、広汎性発達障害が疑われるグループが3つ、注意欠陥多動性障害が疑われるグループが2つ、知的障害が疑われるグループが1つ、障害があるとは断定できないが集団参加が難しい(一人遊びが多い)グループが1つであった。それぞれのタイプが発達障害や知的障害の特徴を有しているかを確認するため、クラスター間で幼児用発達障害スクリーニング尺度の得点を比較した。その結果、広汎性発達障害が疑われる3つのクラスターは、他のクラスターに比べて広汎性発達障害の尺度得点が有意に高かった。また注意欠陥多動性障害が疑われる2つのクラスターは、注意欠陥多動性障害の尺度得点が有意に高かった。しかし知的障害が疑われるクラスターは、知的障害の疑い尺度の得点に有意差は見られなかった。一人遊びが多いクラスターも、スクリーニング尺度では顕著な傾向が見られなかった。本研究の結果から、保育者が感じる「気になる子ども」の中には発達障害が疑われる子どもが確実に存在していることが明らかになった。

キーワード：幼児、特別支援、発達障害、アセスメント

Key words : Young Children, Special Care, Developmental Disorders, Assessment

問題と目的

2005年に発達障害者支援法が施行され、発達障害の早期発見・早期支援を行うことが国及び地方公共団体の責務であると明示された。そのためには、保育現場で発達障害児を早期に発見し、幼児ひとりひとりの特徴に応じた支援計画を作成することが重要である。しかし幼児期に、特に保育現場で発達障害の特徴を的確に捉えることは難しいのが現状である。また、発達障害の疑いがありながら確定診断を受けていない「気になる子ども」に対する実態把握と早期支援は不十分である。

本郷・飯島・平川・杉村(2007)は「気になる子

ども」を「知的な発達に遅れは認められないにもかかわらず、「落ち着きがない」「他児とのトラブルが多い」「自分の感情をうまくコントロールできない」などの特徴を持つ子ども」と定義している。また日高・橋本・秋山(2008)は、「発達障害児を含めた、保育現場で保育者が気がかりになる子」と定義している。このように、「気になる子(ども)」という用語は概念的・操作的定義が確定された専門用語ではない。現在のところ、保育者の視点から保育に困難さを感じる子どもであり、その背景に何らかの障害の存在が疑われる子どもを指す漠然とした用語である。

平澤・藤原・山根(2005)の調査では、保育所において「気になる子ども」が在籍しているかどうかを尋ねたところ、75.8%の保育所から在籍していると

1) 砺波市北部こども園

いう回答が寄せられた。同様の調査で、嶋野（2006）によれば85%、古市（2009）によれば79.1%の保育所や幼稚園で、障害の診断を受けていないが保育場で困難を抱える子どもが在籍していることが報告されている。

また斎藤・中津・栗飯原（2008）は、保育者に対して「気になる子ども」の保育を経験したことがあるかを尋ねた。その結果、96.6%の保育者が「気になる子ども」の保育経験を有していた。池田・郷間・川崎・山崎・武藤・尾川・永井・牛尾（2007）の調査では、保育者の68.5%が「気になる子ども」のことで保育上の問題や悩みがあると回答していた。さらに嘉数（2007）によれば、56%の保育者が「気になる子ども」が増加傾向にあると感じていた。また郷間・圓尾・宮地・池田・郷間（2008）の調査では、障害児と「気になる子ども」への対応を比較した。その結果、「気になる子ども」に対する方が保育者が困難さを感じる人が多いこと、しかし「気になる子ども」のことで他機関との連携をすることは少ないことを報告している。

したがって、概念的には曖昧なままではあるが、保育現場に一定数の「気になる子ども」が在籍していることは事実である。そして、多くの保育者が「気になる子ども」のことで悩んでいるが、保育者が支援を受けることは少ないという実態がある。そこで、保育現場で保育者自身が「気になる子ども」の特徴を正確に把握し、有効な支援を立案できるような体制を構築することが、保育の質を向上するために急務である。

しかし久保山・齊藤・西牧・當島・藤井・滝川（2009）は、「保育者が『気になる子ども』という言葉を使うのは、子どもが乳幼児であるため障害があるかもしれないのに診断がついていない場合や、子どもが示す気になる行動が障害によるものなのか環境のためなのかのかわかりにくい場合が多い」と述べている。つまり、保育者がいう「気になる子ども」は、実態や本質を把握することが困難な子どもである。したがって、保育者が「気になる」と感じている内容を整理し、保育者の目から見た「気になる子ども」の特徴をわかりやすく体系化する必要がある。

さらに「気になる子ども」の中に、本当に発達障害やその疑いのある子どもが含まれているかを確認する必要がある。しかし幼児期に保育現場で発達障害やその疑いのある子どもの実態を評価するための有効なアセスメント用具はまだ開発の途上である（本郷ら,2007;大六・長崎・園山・宮本・野呂・多田・岡

崎・東原・竹田・柿澤・沢尻・菊池,2008)。これらの中から有効性の高いアセスメント用具を選択し、保育者が感じる「気になる子ども」の特徴との関連性を検討することも必要である。

そこで本研究では、保育者に対して「気になる子ども」の実態と発達障害の可能性についての調査を行う。本研究の目的は2つある。まず、どのような点で気になるのかを自由記述で述べてもらい、それを分類することで、「気になる子ども」の中にどのような子どもたちが含まれているのかをタイプ分けする。それによって、保育者がある子どものことを「気になる」と感じた場合に、どのような観点から子どもの実態を把握すべきかについて指針が得られると予想される。

本研究の第2の目的は、分類された「気になる子ども」のタイプが、発達障害の特徴を有しているかを確認することである。保育者が感じる「気になる子ども」のいくつかのタイプで、実際に発達障害の特徴が認められれば、これらの子どもたちには発達障害児への対応と同様の支援を行うことが有効であると推定される。したがって、保育者の悩みを軽減し、有効な支援計画を立案するための示唆が得られるであろう。

なお本研究では、開発中の発達障害に関するアセスメント用具の中から、小林・尾崎・水内・佐藤（2008）による「幼児用発達障害スクリーニング尺度（以下、スクリーニング尺度と略記）」を用いる。小林ら（2008）のスクリーニング尺度は、広汎性発達障害児と注意欠陥多動性障害児の行動特徴を、他の障害や知的障害、及び健常児から有効に弁別できる尺度だからである。このスクリーニング尺度と、保育者から見た「気になる子ども」のタイプとの関連性を検討する。

方法

調査手続き 本研究では、小林ら（2008）がスクリーニング尺度を開発する過程で収集した資料を用いた。小林ら（2008）の調査の概要は次の通りである。

富山県内の幼稚園・保育所計96カ所に、フェイスシートとスクリーニング尺度（原版）からなる質問紙を5部ずつ郵送し、郵送によって回収した。調査では、幼稚園・保育所に在籍する（またはかつて在籍していた）幼児について保育者に記入を求めた。調査対象児の選出は次の4段階からなっている。なお調査に際しては、対象児の選出過程を示すフローチャートを同封した。

①在籍中に障害の診断名がついている幼児を選出してもらい、診断名を記載した上でスクリーニング

尺度（原版）への記入を求めた。

- ②調査用紙に残部があった場合には、在籍時には診断名が確定していなかったが、就学後に診断が確定した児童について、診断名と5歳児点での行動特徴を想起してスクリーニング尺度（原版）への記入を求めた。
- ③調査用紙にさらに残部があった場合には、現在在籍している幼児の中で「気になる子ども」を選んでもらい、気になる理由（自由記述）を記載した上でスクリーニング尺度（原版）への記入を求めた。
- ④調査用紙にさらに残部があった場合には、定型的な発達をしている5歳児を選んでもらい、スクリーニング尺度（原版）への記入を求めた。

本研究における対象児 上記の調査対象児のうち、③の「気になる子ども」306名についての回答を分析対象とする。幼稚園と保育所に共通した特徴を検討するため、3歳未満児のデータを除外した。さらに、既に修了した子どものデータおよび自由記述に記載漏れのあったデータを分析から除外したので、最終的な対象児は293名（内訳は男児244名、女児49名）となった。

調査期間 2007年10月から12月であった。

調査内容 本研究で用いた質問紙は、次の2つの部分で構成されている。

(1) **対象児の属性** フェイスシートには、回答の記入日、対象児の性別、年齢、対象児のタイプ（上記の①～④のどれにはてはまるかと診断名）の記入を求めた。子どものタイプが②であった場合には、「ちょっと気になる子が在籍している場合、気になることをな

るべく具体的にお書きください」という設問に対して自由記述で回答を求めた。

(2) **スクリーニング尺度** 調査の時点では、スクリーニング尺度（原版）が用いられた。これは広汎性発達障害（以下PDDと略記）の特徴を尋ねる30項目、注意欠陥多動性障害（以下ADHDと略記）の特徴を尋ねる31項目、学習障害（以下LDと略記）の特徴を尋ねる29項目の、合計90項目からなる尺度である。スクリーニング尺度の各項目は、発達障害児に特徴的な行動を記述したもので、対象児がそのような行動を取るかどうかについて、1：ほとんどない、2：ときどきある、3：よくあるの3件法で評定を求めた。

ただし、小林ら（2008）によって90項目の原版から33項目のスクリーニング尺度（短縮版）が開発されたため、本研究でも短縮版のスクリーニング尺度のデータを用いて分析する。これはPDD尺度（2因子計14項目）、ADHD（2因子計14項目）、知的障害の疑い（以下MRと略記）尺度（5項目）からなっている。以下スクリーニング尺度と表記した場合には、33項目からなる短縮版を指す。

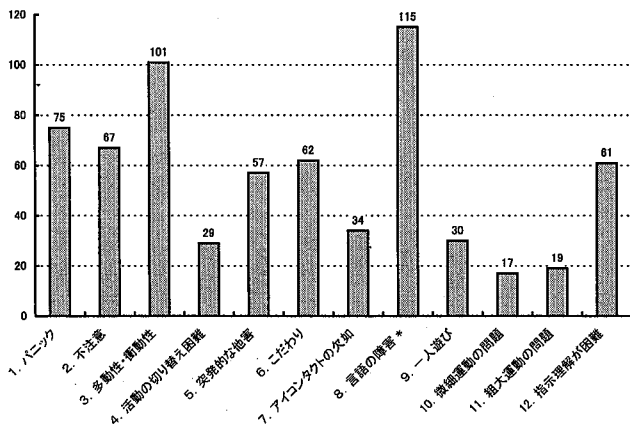
結果

1. 気になる理由の分類

自由記述で得られた「気になる」理由を1項目ずつカードに転記し、分類した。自由記述欄で1人の子どもに複数の記述があった場合は、内容ごとにそれぞれ別のカードに転記した。そして第一著者と、幼児教育と特別支援教育を専門とする大学教員2名の計3名で

Table 1 気になる理由のカテゴリーと記述例

1. パニック	7. アイコンタクトの欠如
・自分の欲求が通らないと、激しく泣き叫ぶ	・視線を合わせて話すことができない
・1回泣くと落ち着くまで時間がかかる	・目を合わせる手が苦手である
2. 不注意	8. 言語によるコミュニケーション障害
・活動中、注意がそれて他のことをし始める	・語彙が少ない、一語文でしか話さない
・一つのことに集中できない(絵を描く等)	・会話はオウム返しが多い
・使ったものを片付け忘れる	・言葉遣いが妙に大人びている
3. 多動性・衝動性	9. 一人遊び
・話を最後まで聞くことが出来ず、遮って話し始める	・友達と遊ばず、好きな遊びを一人でしている
・落ち着きがなく、立ち歩く(走る)ことが多い	・友達をうまく誘えない
4. 活動の切り替え困難	10. 微細運動の問題
・片付けの時間になっても遊び続ける	・はし、鉛筆、はさみ等をうまく使うことができない
・集団での活動の際に、なかなか集まることができない	・制作のときに不器用である
5. 突発的な他害	11. 粗大運動の問題
・興奮すると奇声を発し、誰でも構わず叩く	・バランスよく歩くことができない
・かっとなりやすく突発的に行動する	・姿勢を保持するのが難しい
6. こだわり	12. 指示理解が困難
・特定のもの(水、乗り物、トイレ等)への興味が強い	・先生の話聞いてはいるが内容を理解できていない
・遊びのパターンが決まっている	・周囲の友達の動きを見て行動している



*正式なカテゴリー名は「言語によるコミュニケーション障害」

Figure 1 各カテゴリーの該当者数

協議し、K-J法による分類を行った。K-J法により保育者が「気になる」と記載した理由を12個のカテゴリーに分類した。分類されたカテゴリーと記載例をTable 1に、各カテゴリーに該当した幼児の数をFigure 1に示す。

Figure 1からわかるように、保育者が「気になる」理由で最も多かったものがエコラリア（反響言語）や語彙の少なさなどからなる「8. 言語によるコミュニケーション障害」（115名）であった。次に多かったのが、落ち着きがないなどの「3. 多動性・衝動性」（101名）であった。それ以降は回答数の多かった順に、「1. パニック」（75名）、「12. 指示理解が困難」（61名）、

「2. 不注意」（67名）、「6. こたわり」（62名）、「5. 突発的な他害」（57名）、「7. アイコンタクトの欠如」（34名）、「9. 一人遊び」（30名）、「4. 活動の切り替え困難」（29名）、「11. 粗大運動の問題」（19名）、「10. 微細運動の問題」（17名）であった。

2. 気になる理由に基づく対象児の分類

保育者の自由記述からどのような子ども像が浮かび上がるかを検討するため、クラスター分析によるケースの分類を行った。まず12個のカテゴリーのそれぞれについて、対象児があてはまる場合には1点を、あてはまらない場合は0点を与え、Ward法によるクラスター分析を実施した。その際に、距離行列として平方ユークリッド距離を使用した。分類にあたっては、分類するクラスターの数を5～9個に設定し、Ward法・最長距離法・最短距離法による分類を実施した。最終的に、Ward法で結合されたクラスターが最も解釈しやすかったため、Ward法による分類結果を用いた。

クラスター数を決定するために、まず5～9個に分類されたクラスターがどのような特徴を有しているかを検討し、5～9個のクラスターと「気になる理由」の12カテゴリーとのクロス集計表を作成した。そして、それぞれのクラスターが特定のカテゴリーに多く分布しているか（または分布が少ないか）を確認するため、各々のクロス集計表について χ^2 検定と残差分析を行った。各クラスターの「気になる理由」に対す

Table 2 各クラスターの特徴（カテゴリーに該当する人数）

クラスター	パニック	不注意	多動性・衝動性	活動の切り替え困難	突発的な他害	こたわり	アイコンタクトの欠如	言語の障害	一人遊び	微細運動の問題	粗大運動の問題	指示理解が困難
CL 1 (N=45)	5 (-2.4)	6 (-1.7)	7 (-2.9)	5 (.3)	4 (-1.9)	3 (-2.6)	3 (-1.1)	20 (.8)	0 (-2.5)	12 (6.5)	16 (8.6)	35 (10.2)
CL 2 (N=67)	20 (.9)	13 (-.8)	24 (.3)	9 (1.1)	15 (.7)	0 (-4.8)	10 (1.0)	66 (11.3)	0 (-3.1)	2 (-1.1)	0 (-2.5)	3 (-3.8)
CL 3 (N=25)	3 (-1.6)	9 (1.6)	0 (-3.8)	2 (-.3)	0 (-2.6)	7 (.9)	0 (-1.9)	6 (-1.6)	22 (13.4)	1 (-.4)	2 (.3)	3 (-1.1)
CL 4 (N=31)	31 (10.0)	0 (-3.2)	1 (-3.9)	8 (3.1)	3 (-1.5)	17 (4.9)	2 (-.9)	5 (-2.8)	4 (.5)	0 (-1.5)	0 (-1.6)	1 (-2.6)
CL 5 (N=75)	16 (-1.0)	10 (-2.3)	37 (3.1)	3 (-2.0)	31 (5.5)	9 (-2.3)	16 (3.0)	1 (-7.8)	3 (-2.1)	0 (-2.5)	0 (-2.6)	6 (-3.2)
CL 6 (N=24)	0 (-3.0)	24 (9.4)	21 (5.7)	1 (-1.0)	0 (-2.5)	0 (-2.6)	0 (-1.9)	0 (-4.1)	0 (-1.7)	0 (-1.3)	0 (-1.3)	9 (2.1)
CL 7 (N=26)	0 (-3.1)	5 (-.5)	11 (.9)	1 (-1.1)	4 (-.5)	26 (10.3)	3 (.0)	17 (2.9)	1 (-1.1)	2 (.4)	1 (-.6)	4 (-.7)
χ^2 乗値	116.05	99.43	71.65	14.79	40.49	152.51	15.95	176.74	184.57	45.14	76.77	118.41
有意水準	(p<.001)	(p<.001)	(p<.001)	(p<.05)	(p<.001)	(p<.001)	(p<.05)	(p<.001)	(p<.001)	(p<.001)	(p<.001)	(p<.001)

数値は期待値, ()内は自由度調整済み残差

る分布のパターンを検討し、2人の著者の協議により7クラスターによる分類が「気になる子ども」の特徴をもっとも明確に表していると判断した。

7つのクラスターに分布した人数は、クラスター1 (CL1と略記、以下同様): 45人、CL2: 67人、CL3: 25人、CL4: 31人、CL5: 75人、CL6: 24人、CL7: 26人であった。7つのクラスターが12のカテゴリーにどのように分布しているかを表したクロス集計表をTable 2に示す。Table 2に示したように、12のカテゴリーについての χ^2 値は14.79~184.57 (df=6) の範囲であり、全てのカテゴリーでクラスターごとの人数の分布が有意に異なっていた。以下に特徴のいくつかを述べる。

「1. パニック」については、CL1・6・7で該当する幼児が有意に少なく、CL4が有意に多かった。特にCL6・7では該当する幼児が全くおらず、逆にCL4は31人全員にパニックが認められた。

「2. 不注意」については、CL6が有意に多く、CL4・5が有意に少なかった。CL6では24人全員に不注意の特徴が見られ、CL4では該当する幼児が全くいなかった。「3. 多動性-衝動性」については、CL5・6が有意に多く、CL1・3・4が有意に少なかった。特にCL6は24人中21人に多動性-衝動性が見られた。逆にCL3には該当者が全くおらず、CL4でも該当者は31人中1人だけであった。

「4. 活動の切り替えの困難」についてはCL4が有意に多く、CL5は有意に少なかった。このカテゴリーは該当者が29人しかいないが、そのうちCL4に8人が含まれていた。逆にCL5での該当者は3人だけであった。

なお、クラスターによって男女比や年齢構成が異なっているかを検討するため、7クラスター×性別、7クラスター×年齢の χ^2 検定を行った。その結果、性別については $\chi^2(6) = 4.58$ で有意とならなかった。年齢に関しては、人数比を考慮して次の6つの年齢層に分けて検定を行った。グループ1は月齢48ヶ月未満(52名)、グループ2は月齢48~53ヶ月(31名)、グループ3は月齢54~59ヶ月(42名)、グループ4は月齢60~65ヶ月(60名)、グループ5は月齢66~71ヶ月、グループ6は月齢72ヶ月以上(33名)であった。その結果、 $\chi^2(30) = 26.19$ で有意とならなかった。したがって、各クラスターに性別や年齢の偏りはないといえる。

3. スクリーニング尺度からみた各クラスターの特徴

各クラスターがスクリーニング尺度でどのような特

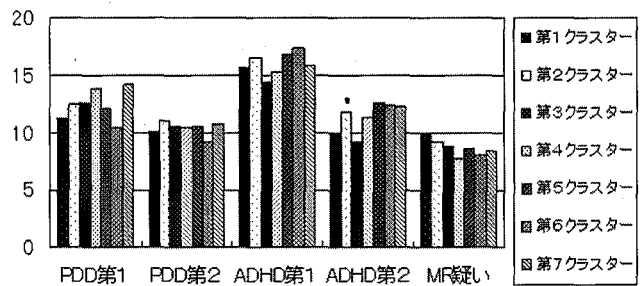


Figure2 スクリーニング尺度の得点

徴を示しているかを検討するため、スクリーニング尺度の5つの下位尺度の平均値を求めた。各群の平均値をFigure 2に示す。

クラスター間で平均値に差が見られるかを検討するため、7つのクラスターを独立変数とし、スクリーニング尺度の5つの尺度得点を従属変数とする一要因の多変量分散分析を実施した。個別変量についてクラスターの主効果が有意または有意傾向となった場合には、Tukey's WSD法による多重比較を行った。

多変量分散分析の結果、Wilks's $\Lambda = .679, F(30.00, 894.00) = 3.028$ で、0.1%水準の多変量主効果が得られた。個別変量の主効果は、PDD第1尺度で $F(6, 227) = 4.592$ ($p < .001$)、PDD第2尺度で $F(6, 227) = 1.824$ ($p < .10$)、ADHD第1尺度で $F(6, 227) = 2.391$ ($p < .05$)、ADHD第2尺度で $F(6, 227) = 4.064$ ($p < .05$)、MR疑い尺度で $F(6, 227) = 2.074$ ($p < .10$)となった。

多重比較の結果、PDD第1尺度ではCL6・1 < CL7・4、PDD第2尺度ではCL6 < CL2、ADHD第1尺度ではCL3 < CL6、ADHD第2尺度ではCL3 < CL2・5・6・7で有意差が得られた。MR疑い尺度では主効果が有意傾向であったが、クラスター間の有意差は見られなかった。

考察

1. 気になる子どもの特徴

保育者が気になる理由で最も多かったのが、「エコラリア」や「語彙の少なさ」などの「8. 言語によるコミュニケーション障害」であった。非言語的コミュニケーションである「7. アイコンタクトの欠如」と合わせると回答全体の約23%を占める。これは、小谷・山下(2008)が同じく自由記述式回答の質問紙調査を行い、最も多かった回答が「目が合わない」「発音が気になる」などを含む「コミュニケーション」であり、全体の26.1%を占めていた結果と類似している。

日高ら(2008)は「気になる子が示す問題行動は

多くが園で友達とのコミュニケーション場面でみられる」と述べている。また、池田ら（2007）の質問紙調査でも「ことば・コミュニケーションに関する問題が多い」という結果であった。これらのことから「対保育者」「対他児」とのやりとりを“気になる”と感じる保育者が多いことが明らかとなった。また、西村・小泉（2008）が『言葉の表現』『ことば遊び』の2つの側面は発達の遅れが関係している」と述べているように、「言葉」の発達は、“自閉的傾向”や“全般的な発達の遅れ”が疑われる指標であると考えられる。そのため、保育者は言葉の発達に関して比較的意識が高いことも影響していると推測される。

ほぼ同数で次に多かったのが「落ち着きがない」などが含まれる「3. 多動性・衝動性」であった。金田・黒澤（2009）の調査では「多動性／衝動性」で最も困っているという結果であった。この他にも、「コミュニケーション面」と「多動・衝動性」が“気になる”理由として多く挙げられるのは多数の先行研究と一致する（嶋野,2008;久保山ら,2009）。これらは保育現場という集団の中において初めて顕在化し、保育者にとって目に付きやすい行動問題であるためであると考えられる。

次に多かったのは「1. パニック」であった。“パニック”とは“自閉症児が自分の思い通りにならないときにかんしゃくを起こすこと”を指しており、教育関係者の中では一般的に用いられるためカテゴリ一名として採用した。かんしゃくは自閉性障害の診断基準として存在してはいないが、幼少期の行動症状として挙げられている（APA,2000）。特に発達障害の知識が少ない保育者にとっては、子どもが“パニック”を起こす原因が分からず、その対応に悩んでいることが伺われる。

全般的な発達の遅れが疑われる「粗大運動」「微細運動」の回答数は少ない結果であった。運動発達面は保育者にとって視覚的に理解しやすく発見しやすいため“気になる”という概念で捉えることは少ないのではないと思われる。

「12. 指示理解が困難」には「何度言っても伝わらない。」などの意見が含まれていたが、これには様々な要因が考えられる。指示を聞く子ども側の発達だけでなく、保育者の指示の出し方や指示を出している時の周囲の状況や環境が影響しているとも考えられるからである。

これらのことから、保育者が感じる“気になる”理由には、集団場面において顕著になる問題、子どもの発達の問題、保育者の技術面が影響する問題があること

が分かった。

2. 気になる理由に基づく子どもの分類

保育者の自由記述を基にしたクラスター分析の結果、「気になる子ども」を7つのクラスターに分類すると解釈が容易であると考えられる。各クラスターで特徴的だった「気になる理由」を χ^2 検定と残差分析で検討した結果、7つのクラスターは次のような特徴を有しているとみなすことができる。

CL 1 (45名)：指示理解が困難であり、粗大運動や微細運動の発達に問題が見られる。

CL 2 (67名)：エコラリアや語彙の少なさなど、言語によるコミュニケーションに問題がみられる。

CL 3 (25名)：一人遊びが多く、やや不注意さが見られる。

CL 4 (31名)：パニックが多く、こだわりがあり、活動の切り替えが困難である。

CL 5 (75名)：突発的な他害があり多動性・衝動性が高く、アイコンタクトの欠如がやや見られる。

CL 6 (24名)：不注意と多動性・衝動性が多く見られる。

CL 7 (26名)：こだわりが強く、言語によるコミュニケーションに問題が見られる。

保育者の自由記述から各クラスターの特徴を検討した結果、PDDが疑われたのはCL 2・4・7の3つである。これらの中で、CL 2は言語によるコミュニケーションに問題があり、CL 4はパニックやこだわりが強く、CL 7こだわりや言語コミュニケーションの問題が見られた。PDDの特徴のうち、言語コミュニケーションの問題と、興味・関心が限定されていたり行動面での問題が単独で出現したり重複して出現したりするため、保育者は広汎性発達障害と判断してよいかどうか迷っていると思われる。

また、7クラスター中でADHDが疑われるのはCL 5・6の2つである。CL 5は、突発的な他害と多動性・衝動性に該当する子どもが多かった。したがって、多動性－衝動性が顕著に見られる子どもだと考えられる。CL 6は、不注意と多動性・衝動性の両方が見られる、ADHDの混合型である可能性が高い。

またCL 1は、指示理解や運動発達に問題が見られることから、全般的な発達の遅れ（知的障害もしくは知的能力が境界級）が疑われる。

最後に、CL 3は一人遊びが多いことが特徴的である。しかし、一人遊びが多く見られる理由としては、その子どもの気質的な問題や生育環境の要因も考えられる。したがって、CL 3を発達障害や知的障害とす

ぐに結びつけるのは困難である。おそらく、集団の中でやや孤立しがちな子どもたちについて、保育者が子どもの本質をどのように理解すればよいか困難さを感じていると思われる。

3. スクリーニング尺度からみた各クラスターの特徴

多変量分散分析と多重比較の結果から、いくつかのクラスターでは発達障害の特徴を示唆する結果が得られた。以下では、下位尺度ごとにその特徴を検討する。

まずPDD第1尺度「こだわりや感覚の過敏さ」においては、CL4とCL7の得点が他のクラスターに比べて高いことが示された。この2つのクラスターは、保育者の自由記述からもこだわりが指摘されていたため、スクリーニング尺度との一貫性が示された。したがってPDDが強く疑われるグループといえよう。

PDD第2尺度「他者との関係性」では、CL2の得点が高かった。このクラスターは、保育者の自由記述によれば、言語によるコミュニケーションに問題がある子どもたちである。おそらく、エコリアや語彙の少なさなどコミュニケーション上の問題を有しているため、他者との関係が構築できないと考えられる。このクラスターは、感覚的な過敏さやこだわりは強くないが、明らかにPDDが疑われる子どもたちのグループである。

ADHD第1尺度「不注意と多動」では、CL6の得点が高かった。またこのクラスターは、ADHD第2尺度「周りに迷惑をかける行動」でも得点が高かった。CL6は保育者の自由記述でも、不注意と多動性・衝動性が多く見られる子どもたちであり、ADHDが強く疑われるグループである。

ADHD第2尺度に関しては、CL5も他のクラスターより得点が高かった。このクラスターは保育者の自由記述からも「突発的な他害」と「多動性・衝動性」が示されていた。したがって、このクラスターもADHDである可能性が高い。

さらにADHD第2尺度では、CL2・7も得点が高かった。小林ら(2008)によれば、ADHD尺度は幼児期にADHDの診断が下されている子どもが他の障害児や健常児に比べて高得点を示す項目を選んで作成されている。しかし、自閉的傾向がある子どもにおいても他害など周囲に迷惑をかける行動をとることはある。宇野・中井(2009)は通常学級の担任向けのチェックリストを作成しているが、その中でもPDD群の判別が難しいと述べている。また、平林(2002)は、小学校の時点でADHDから高機能PDDへと診断が変わった子どもが35%存在すると報告している。これらのこ

とから、保育者は集団生活で困難を示す子どもを「気になる子ども」と感じるため、PDDとADHDの識別に困難を感じているのかも知れない。

MR疑い尺度は、個別変量の主効果が有意傾向となったが、多重比較ではクラスター間に差が見られなかった。保育者の記述から見た各クラスターの特徴を考えると、全般的な発達の遅れが疑われるCL1が他群よりも得点が高いことが予想された。実際に得点の布置を見ると、CL1の得点が最も高かったが、他のクラスターとの間で有意差は得られなかった。明らかな知的障害ではなく、保育者が「気になる」というレベルの子どもの場合には、スクリーニング尺度上では顕著な知的障害の特徴が見られないと考えられる。

4. 全体的考察

本研究では、保育者が「気になる子ども」と感じている子どもがどのような特徴を示しているのか、自由記述からその検討を試みた。その結果、PDD・ADHD・MRが疑われる子どもたちのグループと、障害があるとは特定できないが一人遊びが多く集団参加ができない子どものグループが存在することが示された。したがって保育者が感じる「気になる子ども」は、いずれも集団生活で何らかの困難さを有している子どもであることが示された。

本研究からは、保育者が感じる「気になる子ども」の実態を整理することで、発達障害の可能性を早期に発見できることが示唆された。保育者の自由記述の整理からは全般的な発達の遅れ(知的障害)が疑われるグループが得られたが、スクリーニング尺度との関連性はみられなかった。したがって、全般的な発達の遅れが疑われる子どもについては今後の検討が必要であるが、少なくとも発達障害の疑いがある子どもを特定することは可能である。保育者が早い段階でこうした特徴に気づくことができれば、その後の適切な支援につながる可能性がある。

したがって今後は、「気になる子ども」の本質を早期に特定し、有効な支援を行うシステムの構築を考える必要がある。具体的には、保育者との事例検討会(ケースカンファレンス)の中で、①保育者が感じる「気になる理由」を参加者同士の協議によって整理し、②スクリーニング尺度に記入することで対象児の特徴を把握する、という手続きを踏むことで、子どもの本質的な特徴を見極め、有効な支援計画を立案できると思われる。こうした、効果的なケースカンファレンスの進め方についての実践的な研究が望まれる。

なお本研究では、「一人遊び」が多いなど、障害の

有無という観点からは説明が難しいグループも存在した。一人遊びの多さには、その子ども自身の特性（気質）や生育環境、保育現場の環境や他児との関係性など、様々な要因が考えられる。今回の質問紙調査では、家族構成や生育歴、クラスの様子などの背景的な要因については尋ねていない。したがって本研究からは、一人遊びが多いグループの子どもたちの本質を解明することはできなかった。今後は、障害とはいええないが集団生活上の困難を有する子どもの本質的な特徴を理解するための調査研究を継続していく必要がある。

引用文献

- APA（アメリカ精神医学会）高橋三郎・大野裕・染矢俊幸（訳）2002 D S M - I V - T R 精神疾患の診断・統計マニュアル（新訂版）医学書院（American Psychiatric Association 2000 *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 4th. Text Revision*）
- 大六一志・長崎勤・園山繁樹・宮本信也・野呂文行・多田昌代・岡崎慎治・東原文子・竹田一則・柿澤敏文・坂尻千恵・菊池麻由子 2008 5歳児発達障害・知的障害スクリーニング質問票における発達の変化およびスクリーニング精度 筑波大学障害科学研究, 32, 35-45.
- 古市真智子 2009 保育者から見た特別な支援が必要な子どもの行動特徴— 一明らかな知的障害のない子どもについて— 中部大学現代教育学部紀要, 1, 157-164.
- 郷間英世・圓尾奈津実・宮地知美・池田友美・郷間安美子 2008 幼稚園・保育園における「気になる子」に対する保育場の困難さについての調査研究 京都教育大学紀要, 113, 81-89.
- 日高希美・橋本創一・秋山千枝子 2008 保育所・幼稚園の巡回相談における「気になる子どものチェックリスト」の開発と適用 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 59, 503-512.
- 平林伸一 2002 軽度発達障害の診断をめぐって。小児の精神と神経, 42 (3), 145-152.
- 平澤紀子・藤原義博・山根正夫 2005 保育所・園における「気になる・困っている行動」を示す子どもに関する調査研究— 障害群から見た該当時の実態と保育者の対応および受けている支援から— 発達障害研究, 26, 256-267.
- 本郷一夫・飯島典子・平川久美子・杉村僚子 2007 保育の場における「気になる」こどもの理解と対応に関するコンサルテーションの効果 LD研究, 16, 54-264.
- 池田友美・郷間英世・川崎友絵・山崎千裕・武藤葉子・尾川瑞季・永井利三郎・牛尾禮子 2007 保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究 小児保健研究, 66 (6), 815-820.
- 金田利子・黒澤祐介 2009 “ちょっと気になる子”の在園実態についての調査研究. 白梅学園大学短期大学 教育・福祉研究センター研究年報, 14, 130-131.
- 小林真・尾崎庸子・水内豊和・佐藤徳 2008 幼児用発達障害スクリーニング尺度の開発 (1) — 尺度の作成過程と予備調査の概要—
- 小谷隆史・山下勲 2008 『気になる子ども』の実態とその対応に関する研究. 安田女子大学心理教育相談研究, 7, 1-14.
- 久保山茂樹・齊藤由美子・西牧謙吾・當島茂登・藤井茂樹・滝川国芳 2009 「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査— 幼稚園・保育者への機関支援で踏まえるべき視点の提言— 国立特別支援教育総合研究所研究紀要, 36, 55-76.
- 西村智子・小泉令三 2008 保育者のみ「気になる」子どもの行動特徴. 日本教育心理学会第50回総会発表論文集, 429.
- 斎藤愛子・中津郁子・粟飯原良造 2008 保育所における「気になる」子ども保護者支援— 保育者への質問紙調査より— 小児保健研究, 67 (6), 861-866.
- 嶋野重行 2008 「気になる」子どもに関する研究 (2) — 短大生がとらえた「気になる」子どもの行動特徴— 日本教育心理学会第50回総会発表論文集, 428.
- 宇野宏幸・中井富貴子 2009 小学校通常学級担任向け子どもの行動チェックリスト作成の試み— 学校場面における発達障害児の行動特徴に関する定量的分析— 兵庫教育大学研究紀要, 34, 49-59.

付記

本論文は、第一著者（藤井）が平成21年度に富山大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部を、第二著者（小林）の責任において改稿したものである。

本研究における統計解析は、SPSS Ver.15および17を使用した。